

5. 今月のピックアップ「イネいもち病について」

本病はイネの最も重要な病害です。三重県では、最近では2011年に多発し、日照不足とともに登熟不足による減収の一因となりました。

◆被害の様子◆

苗いもち:育苗箱では、播種1週目頃から、鞘葉全体が暗灰色または褐変し、胞子を作ります。また、1.5葉期以降は、苗が萎縮し、地際部が褐変、枯死します。

葉いもち:初期には、円形または楕円形で、灰緑色または暗緑色の水浸状の病斑を生じます。後に紡錘形や長菱形の褐色病斑となります(図1a)。

穂いもち:穂首、みご、穂軸、枝梗、籾、護穎が侵されます。穂首節は淡褐色から黒褐色、灰白色となり、水分供給が断たれて白穂となります(図1b)。

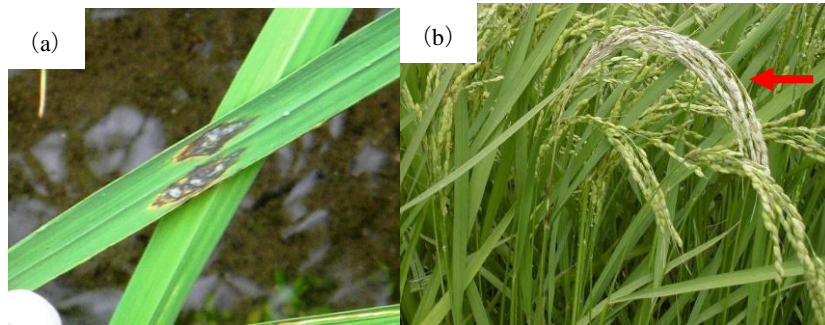


図1
葉いもち病斑
(a)と、穂いもち
による白穂(b)

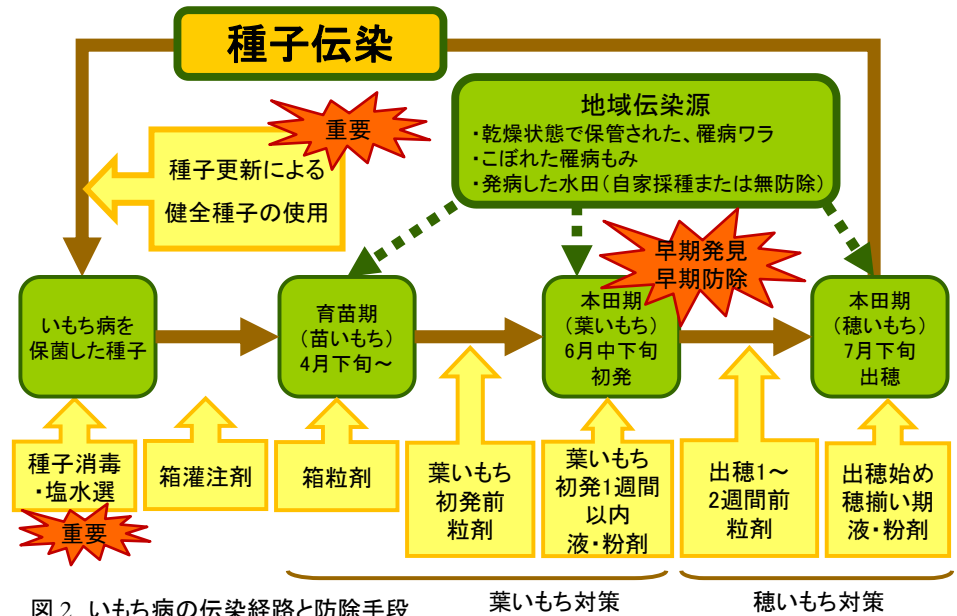
◆伝染経路(図2)◆

本病は種子伝染します。罹病種子が育苗箱内で露出していると、苗いもちを発病します。本田では、補植用の置き苗が早期に発病し、主要な伝染源となります。葉いもちは、三重県では6月中下旬から広域で確認され、7月下旬の梅雨明けまで流行します。上位葉の葉いもち病斑は、穂いもちの伝染源となります。

◆防除のポイント(図2)◆

- (1) 種子更新を行い、健全な種子を使用しましょう。
- (2) 塩水選で罹病種子を除き、種子消毒を確実に行いましょう。

- (3) 常発地では、長期残効型の育苗箱施用剤が有効です。
- (4) 補植用の置き苗は速やかに除去し、枯死させてください。
- (5) 葉いもちの早期発見、早期防除に努めてください。初発段階には予防剤が効果的です。発生が目立つ場合は治療効果の高い液剤、粉剤で防除して下さい。
- (6) 穂いもち防除は、出穂始めから穂揃い期に薬剤散布して下さい。



◆薬剤耐性菌の発生を防止しましょう◆

QoI剤(ストロビルリン系殺菌剤。商品名:嵐、アミスター、イモチエース、オリブライトなど)耐性イネいもち病菌が、西日本の12府県で発生し、問題になっています。

三重県での発生は確認されていませんが、耐性菌の発生を防ぐために、QoI剤の使用は最大年1回までとして下さい。

QoI剤を使用したにもかかわらず、ざり込み症状など発病の重篤な時は、病害虫防除所、農業研究所、農業改良普及センターや、関係団体へ早急に御連絡ください。